

身体が解れば、施術効果が上がる。

施術に活かせる 実践! 解剖学入門

自分の技術や診立てには自信があるのに、なぜか効果が出ない、結果につながらない——

そんな壁を突破する糸口となるのは、本当の「解剖学」の知識かもしれません。

私たちの体内で複雑に作用し合う筋肉や臓器。

その位置関係や連動性を理解することが、手技やカウンセリングにどのように変化をもたらすのか、

海外での人体解剖実習経験を積んだ4人のセラピストに伺っていきます。

人体と向き合うセラピストにとって、実は最も面白く、最も結果を出せる「解剖学」の世界へようこそ!

骨、筋肉、筋膜、リンパ、血管……
皮下のコネクションが見えてくる!

1 身体全体へのアプローチ

2 筋膜へのアプローチ

3 経絡経穴へのアプローチ

4 皮筋^{ひきん}へのアプローチ

学びを極めると
こんなに使える!

実践4CASE

私たちの身体は、精密部品^{精密部品}の集合体ではなく、1つの種から成長する植物のように、1つの細胞から分裂し成長した生命体です。卵子が受精卵となり、胚子から胎児へと成長し生まれてくるまでの過程において、どこかでなんらかの部品が付け加えられることはありません。私たちの身体を構成している3兆とも60兆とも言われる細胞の全ては、ムコ多糖体からなる基質とコラーゲンやエラスチンの繊維と水分で構成された細胞外基質、つまり結合組

「解剖学は難しい」「難しい名前を覚えても、その構造が実際にどこにあるのかがよくわからない」と苦手意識を持っている方も多いのではないのでしょうか? こういった苦手意識や正体不明な不安感は、いったいどこから生まれてくるのでしょうか。解剖学への苦手意識傾向は、解剖学の入り口が、テコの原理に基づいて、「ここに起始部を持ち、ここに停止部を持つこの筋肉が短縮性収縮をする」と、この関節の動きが起こる」という還元主義的な考えに基づいた解剖学を丸暗記させようとするところにあるのではないかと考えています。細かな部品を組み合わせて、それらがお互いにバランスを取り合っている精密機械であるかのように身体を理解しようとする^{精密機械}こと自体に無理があるのではないかと。

現代に生きる私たちは、ルネサンスの時代からレオナルド・ダ・ヴィンチらをはじめとした先人たちが構築してきた解剖学に基づきさまざまな学びを、さまざまな方法で受け取ることが出来ます。美しく描かれた解剖図を解剖学アトラスで眺めることも、また最近ではより立体的な3D解剖学アプリも、購入しやすい価格で手に入れることもできるようになってきました。

学ぶ機会は沢山あるにもかかわらず「精密機器の集合体」ではない

Introduction

深めれば、 解剖学はもっと役立つ

アプローチする部位や位置を覚えても、それだけでは有機的な人体を十分に理解しているとは言えません。

セラピストの“タッチ”に命を吹き込む「解剖学」の知識とはどのようなものか、ロルファーの谷佳織さんが解説します。

谷佳織 ©文 Kinetikos代表取締役